

報告書名：補綴治療による咬合回復が高齢者の QOL・ADL に与えるインパクト

研究者名：矢谷博文¹⁾、森本兼曩²⁾、戸田雅裕²⁾、石垣尚一¹⁾、森重恵美子¹⁾

所 属：¹⁾大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座（歯科補綴学第一教室）

²⁾大阪大学大学院医学研究科社会環境医学講座（環境医学教室）

【目的】

わが国は近未来に超高齢化社会に突入するが、このような社会ではいかに健康寿命をのばすかが医療施策における重要な課題となる。歯科領域においても歯の延命が健康寿命の延長につながると報告されているが、補綴治療による咬合の回復が全身の健康にどのように役立っているかはあきらかではない。

そこで本研究では、補綴治療による咬合回復が高齢者の QOL・ADL にどのように影響を及ぼしているかについて統計的な分析を行った。

【対象および方法】

大阪大学歯学部付属病院顎関節・咬合科診療室に来院した初診患者のうち、初診時に 60 歳以上の患者 63 人（男性 20 人、女性 43 人、平均年齢 70.5 歳）を対象者として、初診日に咬合状態と補綴状況を調べるとともに、QOL および ADL に関する質問表に回答させた。患者の咬合状態と補綴状況については、(1) 残存歯数、(2) アイヒナーによる咬合状態の分類、(3) 欠損部位の補綴歯数、(4) 可撤性義歯の使用の有無、(5) 咀嚼満足度指数の 5 項目により調査した。患者の QOL については、(1) ロートンの PCG モラール尺度、(2) 健康習慣指数 (HPI)、(3) 生活満足度指標 (LSI) の 3 種類の質問表を用いて、ADL については、身体活動性と社会活動性の 2 種類の質問表を用いて調査した。

【結果】

1. 咬合状態（アイヒナーの分類）が患者の QOL・ADL に及ぼす影響

もともと A1 の咬合状態の患者、歯の欠損はあるが、補綴により A1 の咬合状態となった患者、A2 以下の咬合状態の患者はそれぞれ、6、24、33 人であった。3 群間で、咀嚼満足度、QOL、ADL の各指数には有意差は認められなかった。

2. 可撤性床義歯の使用の有無が患者の QOL・ADL に及ぼす影響

可撤性床義歯を使用していない患者（29 人）は使用している患者（34 人）に比べて LSI を除いてすべての指数が高く、とくに咀嚼満足度 ($P=0.016$) と ADL 身体活動性 ($P=0.005$) の各指数は有意に高かった。

3. 性別が患者の QOL・ADL に及ぼす影響

ロートンの PCG のモラール尺度（主観的幸福感）は、男性が女性に比べて有意に高かった ($P=0.018$) が、他の指数に有意差は認められなかった。

4. 咬合状態と QOL・ADL との相関関係

残存歯数と、咀嚼満足度指数、ADL の身体活動性ならびに社会活動性の間に有意な正の相関を認めた。同様に、咀嚼満足度指数とロートンの PCG モラール尺度および HPI の間、ロートンの PCG モラール尺度と HPI ならびに ADL 身体活動性の間、ADL 身体活動性と ADL 社会活動性の間、それぞれ有意な正の相関を認めた。

【考察および結論】

残存歯数が多い患者ほど、咀嚼満足度が高く、身体活動性、社会活動性とも高いことが示された。さらに咀嚼満足度が高い患者ほど、主観的幸福感、健康習慣とも高く、主観的幸福感の高い患者ほど健康習慣に優れ、身体活動性も高いことが示された。本研究の被験者のうちもともとアイヒナー分類 A1 の患者は少なく、大半は補綴治療により咬合状態が A1 に回復した患者であることから、これらの相関関係が得られた一部には、補綴治療による咬合回復が貢献していることが考えられる。

本研究は補綴治療が高齢者の QOL ならびに ADL に与えるインパクトの一端を示したものとする。